医会からのメッセージ

ようこそ神奈川県皮膚科医会へ!

このページは、医会のホームページからの転載です。ご一読ください。

皮膚科医の方へ

会則にもありますように、われわれの医会は神奈川県内で診療や研究などに従事する皮膚科医が中心となって組織されています。すでに会員として様々なアクティビティーに参加されておられる方とは、引き続き「ともに学び、ともに楽しむ」医会ライフをエンジョイしましょう。例会などに参加されない会員には事情がおありでしょうし、神奈川県におられながら未入会の皮膚科医は当医会の存在をご存じなかったのかもしれません。学問にとどまらず、実地診療で遭遇するさまざまな疑問や問題点、さらには一般生活にいたるまで仲間と話し合う場が医会です。情報を交換して、知識を増やし、技術を高め、感性を研く。活動はあくまでも個人の自由意志によるものですが、共に自らを磨き、律する心を養おうではありませんか。

皮膚科以外の医師や歯科医、薬剤師、看護師など医療に従事される方々へ

医会は学術団体であり、皮膚科医の親睦や共益を図るためだけに存在するのではありません。医療を通して社会全般に貢献することを目指しています。皮膚科医のレベルアップを目指した研修機会を設ける一方で、往診をはじめとした在宅医療や学校専門相談医など地域医療にも積極的にかかわっています。さらに、様々な分野からの皮膚科講師派遣要請に応える体制を整えました。看護や介護などの職種からは、「皮膚がＱＯＬを維持する大切な臓器であること」「子供から高齢者まで各年齢に応じたケアの仕方があること」は分かっているが、詳しく具体的に教えてほしい、歯科を含めた他科の医師からは「金属アレルギーなど、原因のみつけ方を教えてほしい」などといった要望が寄せられますが、講師を探せない地域もあるようです。医会では“広報委員会”・“在宅医療委員会”・“学校保健委員会”を中心に最適な講師を探して派遣いたしますので、どうぞ遠慮なくお問い合わせください。

製薬業界や医薬品流通業界の方へ

法人会員の方々には、総会や例会のご案内に加えて、機関誌「神皮」などで医会の活動を報告しています。また、年に３回開催している例会は皆様にとっても有益な内容が企画されていることと思います。共催されるとき以外でも法人会員として遠慮なく参加していただき、医会の活動が皆様同士や皆様と皮膚科医の共通認識を培う機会になればと思います。また、皆様が開催されるさまざまな講演会や勉強会は重要な生涯学習の機会であり、より有意義なものになるよう企画段階から協力させていただきたいと考えています。

最後に“われわれの活動や考え方”をもっとも伝えたい一般の方々へ

皮膚は肉眼で見える臓器ですから、異常があれば誰の目からも分かります。ということは、何かが起こったときに必要なのは血液などの検査よりも、まず熟練した医師がじっくり詳細に診察することなのです。神奈川県皮膚科医会では、皮膚科医に求められる“眼”を養い、知識を増やし、技術を向上させるための生涯教育に力をいれています。皮膚に何かが起こったときには、迷わず皮膚科医を訪れてください。

皆様に、皮膚のことをもっと知っていただきたいと思います。皮膚は内臓に起こった病変を表すことがあり、「内臓の鏡」ともよばれます。皮膚の変化が手がかりになって、重大な内科疾患が発見されることがありますが、なんと内科の症状よりも皮膚症状のほうが先に出ることもあるのです。一方で、全国の高齢者を調べた結果、湿疹や感染症などによる皮膚のトラブルが“ＱＯＬ”を大きく悪化させているというデータがあります。内からも、外からも、皮膚とは上手に付き合っていただきたいと思います。

医会では市民の皆様に皮膚に関する正しい知識と対策を理解していただくために講演会を開催する一方で、勉強会などに講師を派遣するシステムをつくっています。ご希望があれば適した講師を紹介することが可能ですので、気軽にお問い合わせください。また、寝たきりや介護力の事情から通院できずに皮膚病で悩んでおられる場合は、ホームページの地域別「往診皮膚科医リスト」から探してください。

神奈川県皮膚科医会は、“皮膚のことは皮膚科に任せなさい！”と胸を張って言えるように、新しい知識や技術をはじめとした皮膚科の研修と医療の向上に努めています。そして、生まれてから生涯続く皮膚との付き合いを通じて、皆様の健康生活を応援してゆくために活動しています。

所感

所感2010

栗原誠一

この４月から日本医師会が生涯教育制度を改正して、“より幅広く、より効果的に！”をキャッチ・フレーズにした新たなカリキュラムが始まっています。カリキュラムコードに挙げられた項目を見ると、学生の時に使った『内科診断学』（吉利和編集）に出てくる主要症候総論のそれと同じで、臨床医が常識として備えているはずの知識と診断技術です。一人前になった医師がいまさらという気もしますが、ともあれ「医師が不断に学習する姿を国民に見せるため」に３年間で30単位、30コード以上を取得する必要があります。神皮会としては例会や勉強会に様々なコードを盛り込むつもりですので、一緒に楽しみながら研鑽しましょう。

振り返ってみますと、2004年に改まった卒後臨床研修制度が“一般医が診てから専門医へ”という診療システムをあと押しするのではないかと、皮膚科の将来を案じた時期がありました。開業医への影響は今のところ感じられませんが、大学や病院ではどうなのでしょうか。Silent majorityであった一般市民が堂々と発言する世の中になってきました。皮膚科は一般市民を味方につけて、立ち位置を確保する努力を怠ってはならないと思っています。患者さんが受診して良かったと感じる診療をして、皮膚科医ならではの違いを見せるとともに、社会に向けて疾病予防に結びついた啓発活動をすることが必要です。

皮膚科医が互いに刺激し合ってレベルアップ、スキルアップする機会を作ることも医会の使命のひとつです。在宅医療やフットケア、産業医などの勉強会に加えて時宜にかなった講演会を開催していますが、第59回を迎える神奈川医真菌研究会を今年度から共催という形でサポートすることになりました。この会は年に１～２回が積み重なって59回ですから随分と歴史のある会で、発表と講演内容がとても濃く、会場にいるだけで充実した耳学問になります。とくに大学や病院の若い先生方にはお勧めの研究会です。

また、例えば褥瘡をとりあげると、皮膚科医の間に熱意の温度差や診療内容に大きな違いがあるために現場を混乱させていることがあると、往診する仲間で話題になったことがあります。色々な疾患について、少人数で標準的な治療を議論し、すり合わせてレベルアップする機会が必要ではないかと感じています。皮膚科医であることに誇りを持って仕事を続けたいと思っています。どうしたら有意義で楽しい医会が作れるか、皆で一緒に考えましょう。